

911.3
X
仁

滑稽
張家集
仁



渭稽銘錄集自序



凡活字と鉛字と本海因の活字よりも
行はりとよりとて獨立して私の活字の
性と不易流りのやうをもつてゐる
活字也従前一月前半分よりとて
花文乃とより七種八種めどもあつて
石版、鉛版、木版などにさへある
世間の点者様の多くよしむるもの多

船宿しり、かへりて墜ちぬの相とば
乃と御子寓言は船つゝせと蒸しにばれ
舟船を多く一蕉翁のまぶとひて國は
乾こすはれのせば一人よしむか
あまくら風りたてて海きわめくと
流りを変化のととぞとぞと積み裏
船は風流よつてゆり水の流
あゆうとよじだよやく情のよざくは
やくも流りせよはくとよざくは
や

わく行ふと不のまくそくみくの
舟合を師合照れ香くとぞと
ゆきとぞとぞと泥中乃はのざくと
曰くのね士よとくとくとくとくと
くに舟合をやくとおゆよとくとく
ゆきとぞとぞとくとくとくとくと
乃と御子寓言は船つゝせと蒸しにばれ
舟船を多く一蕉翁のまぶとひて國は
乾こすはれのせば一人よしむか
あまくら風りたてて海きわめくと
流りを変化のととぞとぞと積み裏
船は風流よつてゆり水の流
あゆうとよじだよやく情のよざくは
やくも流りせよはくとよざくは
や

好強ひとと構あらうて行ひに至らず
自らのものとすけこなすと心渡せばれ
幸ふるはれん六月一

元文紀元丙辰秋日

毛天下
馬州



引

天子もあだうやうじ初祖踏れ程りとみ
和子せひくく奉ふよほいにんとすく
おととの葉は重をかみてこよめう
ちくのゆくやうじの醫師有空老乃老
君子もあを蕉森翁のとて先と傳ひ
三千れ位ゆくよびしにま門も列同学の
秀うきをとむと毛筆からて松の夜よあー
弘くせりりんと此をよ移ふ腰のへすら

夏雲庵より奉りて書とおまえよも
手取竹られ因みあればひるひるて筆す紙
擦きしむれ筆くわさを近乃好士は筆跡
みまじとくに筆とすく不易流りの
追ひよ端迷つど心情変化せ近きと云
西風れぞ詠よおて内紀の都よおんすと

夏雲庵主

冰蟲



滑稽銘錄集卷之一

尾陽沙門 馬州 撰

尾張

名護屋

有信有德頌

月空庵居士
露川

國君くわくに神山シテ御事と入
きをうそと有難きとめりや
いと、神山も御事とめりや
行すよしの歎くも書せばよし

詩

江國風物記

居士
梅の香と雪と
冬月の小梅山
萬葉の歌
之の白玉指
吟水
の歌

稻葉和中歌
詠

附合

小便(江國風物記)

萬葉の歌

白日(江國風物記)

吟水

古事記(江國風物記)

江國風物記

江國風物記

船底やアアアアア等もれ一叶う
もの萬よ斤耳傍もや儒佛

一あアも須佐もはう郭云
筒ももや年年の都。此小名も

算の山山陽の盤志法

おまうやをもれだごと

鬼の山山也やとやくわうるも

勝ハヤニ筋立てん支挂

附合

モロアヒル他とちもアカモヒ
モロアヒドさロハシトミ惣妻
モロアヒサキリナシテ月 林月

陽丘觀記

摩訶窓
可中

君夢成事にて予は其の事に於者
私心とあるの陽丘あるソヒモテ
雲がよづぶづぶづぶづぶづぶづぶづ
らやじまうたのを放もれどき細

傍そよぐて波音うりうらうと葉ふき
舟達ご船とひよどりに樊田の舟をと太船
小舟海士れぬるをとれむとだぶつま
彦あわづらがのとよひは漁火の氣味を若さ
薩の芦へお風走れ一葉じゝいがた
やうとうかに水うちある早懸カルやも因み
あすけたれまきさと旭と日がゆり
雲風呂毛絞ツヅケなどせぢててをひく事猶
狂歌男女いんぐわくらのねのね

色とちげにてお舟のやまとあうあ
とひうあは陰く波こととじくとゆ
えとあくさくうきのまのまのとよ浦うと
よしき、とくにまくとくにまくとくにまく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとく
岸邊の強くとくとくとくとくとくとくとく
蓑ふさうとくとくとくとくとくとくとく

中よかやん泊り鳥せ渡すにまへる
墓の鳥廻とあはれむはれりはれりと
さやにせに直下こゑふく百田浦と
國とて早廻りとあはれのまへるくや
子ぬれふきとゆきのまへる早ぬ
驚く是處の毒りらへりはりう草う
いづなち水とよきとや夜燈事よもじ
まうひけのまへるく霞の
神と御霊せばとくやあめの御みの
ゑもすむ地とまう田の中に洋こと
ほん農業れまをせかてて鷹乃群
居て車挂くわくたれひていかど
からせどもかのちのちすむ上野の空
海の森くわや布ヤヒシム里と申れ
意ふれ小ね葉半は廻りり申れ
もよお行とりがはり申れ
十二ヶ月の船をたまひのまへるかと
自強乃十一年老師よりモとゆく

よりはるの端不ふ空くと
自よみせつ眼鏡の一世界

石磨銘

可中

日月をもと四つては男と女とよ陰陽
御事の事らうかのへて庶とソア
きてよそ御事て陽トト下をゆゆし
一て底とととと合する時事らうと事ら
彼事固うりどりどりとおもせまよ事ら

わく有りのあらすよひさくの銘物の
移り著く又内に而動すよハ移合
至前向れ事也が事中も事あゆ
りゆゆりて多れ薄りめどりも事
うた女の歌の声は夜のゆりも涙くや
もぐんは夢の毛母多く難きお廢れ
あよ麻乃あくまく事ばの經よ
之を弘法と見とゆる事ばの經よ

とゆき御前をひそめておふの殿よ
奥へと約下駄の足をすすめせの盃甚と
示すに仰りまじゆくお詫辞おまえ
せうとうねむる室をあたう

まのうりんとあえり酒の紀 可中
夜よ難萬よ猪もく雲アレモ
早乙女姉とタマリサキ妻
万歳のゆゑとあまくやさうさん

魚雲り抱き入る一さら
魚雲り魚もくびよ放ともり
我うなぎり柳もくあやえ
浦内やおと舞れせ ササ
波音 めばせと晴れ生海風
大雪やあらぬのうりん人れ育

附合

鰐勝れ叶ふ無心川
またと乃所とまつておまえ

津見と金魚の間をすり抜け
、つもいやふりおみのむ
ま東章の船も波の波のえ
くわだふのゆづくこじく入
すされ起程ひよと龍嘯て
尾ちたましともゑの次あ
タクは白骨と成る御法師

掌の手あ掻き百歩道具てつめ 藤乃
叟くわやうかんがどくの巣
毛自やゆきまされそびて
七年九月わゆー塔乃
掌の手を取たゞりやみの川 右抑
雲れ掌をまくや二王の行あれ
も花びら目くわく女郎む
も紗や小ち刀もくわくすく
萬のよしりや精の梅乃もれ 誰也

常のひき者をハサウエヌとつよ 桃國
波よ生む術やま田とよ風
うとうの波度船のよもよ柳
放されぬ陽をつむやめく風
吹上きて女中れ稀とふ^女増子
ありづらや廢^{アラシ}リサド^{アラシ}の鷺鷺^{アラシ}柄後
名月や幸虹^{アラシ}虹^{アラシ}はえ不又
其は乃座^{アラシ}リカ^{アラシ}生^{アラシ}風^{アラシ}可遊
御^{アラシ}うねぬふる^{アラシ}志^{アラシ}林^{アラシ} 獨ト孫士人ト志

附合

あらかじめふく銘のアラシと
せんのアラシヒヨウのアラシと
向^{アラシ}道^{アラシ}あら^{アラシ}伊勢も^{アラシ}志^{アラシ}ト志

鏡銘

答松亭
林子

さよ日月のアラシ^{アラシ}のアラシ^{アラシ}のアラシ^{アラシ}
もみがざわく黒^{アラシ}ふ^{アラシ}と^{アラシ}い^{アラシ}と^{アラシ}
聖人の清^{アラシ}と^{アラシ}と^{アラシ}と^{アラシ}五昧の用^{アラシ}付^{アラシ}ハ尼^{アラシ}

移々賛美聲の余を續てお或も傳ふ
トキニハ他をんれ事多端とす
他よ傳されあれり事より聖守の境と
山中のどうれは度々事多端とす
アシシテムシのがくとくにようやく神子れ
一ゆきよ急ニ千早振神の境比一川と
伊勢比ニ又よ限き因幡所の境ハ凡乃乃
尼所界也一津頃ノ禁地境ノ端玉北
室大御門より而生れ善惡ノ成れ一様の
かくすき花の下にとくとく色赤ふ花

船持り遠くより陸より後のうらす
佐波川下石邊より邊傍の海輪
涌く唯利くよ飽るハ智惠の境たりし
大やれと子も二の身、うね 林子
川舟や細りアリの佛、さゆ
ウキとて強体の片目やまの日
あそべ一ね、うきとてよもよ

金
金
附合

おどりともうるる境の界めく
おりと山のゆふくらう四ま
在端じ秦相の宿ふ思ひむく
林子

蓬つづりワキア
花さや年、けと有
水月

形代や辛いもむかうてほの無

附合

瑞井の筆はす端じ早ゆき

ねすうこのに一休アリ
もぐれゆばとすもあはりす
背

ほゆれ喜びしよくやぢうる内
けりわがてともくわゆくまづ

附合

主翁とシテのふと約をよ
めひとくやまくわひ日経
もじもひのよと蛭のぬと縫て 番ね

主翁とシテのふと約をよ
めひとくやまくわひ日経
もじもひのよと蛭のぬと縫て 番ね

番ね

旭青閣
蘭朝

中空れらばけの山や風や遊之

遊之

安吉とよ庵丁とよやけ 腹
塊ツブをよみじとアラシテうづくま
英達の心地ハタチとおも席シロうち

附合

こののそくばくをれり
さすけのゆきとすすめ
況にれさまとすすむるの役 村

葉とすくい唐絵のくわ搜査れも 按之
里年れ九十と詩や年ハサの因
全梳よしとくわあまめくわくわ
絆ハシは乃とすくいのやはとくわす 水明
けとくが産と候ふ案ハシくわくわ
暮の橋山や因年ハサくわくわ 鷗波
山くわくわあくとくわくわや暁の鐘 旦ト
石山ハシ瓦と向膠ハルオマフミアツム 射三
かくのま肌ハシとくわくわお白一 雅雲

河童部賦

猿陵

御城に音響とて、其聲七ハ隊の童子
乎、其の色風みては、字より仰ら
聲も、もよして、肩と尻、胸よ闕他去
くうと、うて、ひがみされ、全く人にもかる
傳へやを、傳る傳の傳つれば、まこと、
此童と、水を、やく、底深川と、往かう
ゆく、もと、あら、ひま、ゆく市中
無事、れん、ゆよ、せん、ゆく、の、まよ

行と、渙母よ、の、の、の、の、の、の、
角り、逍遙、さう、烟、よ、鼻、は、わ、く、
人、化して、人、柳、と、頂、血、と、不、あ、く、
四、角、の、化、あ、れ、れ、す、や、あ、ん、一、
に、大、歸、男、称、わ、く、そ、す、れ、称、す、く、
う、く、の、周、よ、煙、と、た、と、煙、^ウ、
煙、の、頂、の、ゆ、び、る、財、ハ、力、方、ア、く、
煙、の、こ、う、萬、年、造、化、ら、ト、シ、
き、い、ゆ、う、と、一、害、あ、く、ゆ、う、

海行のアリトナシニヤ

にテモスル川原アラ波モニ御うぬ

第とおりもよ因ふれむ乃々 猿陵
チモクルやモクルジモクルヨモの段
家アリモ巣ヅキモトチヒ柳
室ノアヒ梅やアヒナシアヒミ
猫の毛アヒ津ヨモ風のゆも 和泉
切脛タツマニ魚アヒヒキ能

サツクレ乳育多シモテ桂樹アレ
九十キモトツケテアヒ水仙花

掌ノ例のアツシト仕モト

城東守山薦
松徑

浦タツリヤササギ庭摩雅比雲の蕨

木立處アヒ死ふる此月の風

居士

瑩娘アヒシテアヒモアヒ森林
アヒキアヒヤアヒ唐丸御く期アヒシ

ゆくと生津江にて御年少
仲男の萬石が引とる沙
夷等を吹散つてかゝらぬ
在住

拂被すれぬ、拂りぬけ、拂りきり。
七人 伯和
生れあく、ほくちのせや氣化セイカ。楚白
引くと、傍よもうく、今朝の雪。
相原氏七歳 清太郎
あづまは、祇士平壁キシタケ。方女ガ 池亭

火爐原 琥珀堂之楓

信光庭の初と考る年、代記する乃と
神乃代と云ふ字がせりもとての者
くたとおなまくさんせんせんが、
起立ヒツク。油石ウシ、固り度タマ、伊豆石成
穿り、とての櫛ハラシ、とての檻ハラシ、室陽屋
ねのばりとえの蔭ハシタ、とての檻ハラシ、室陽屋
ともとある。——支柱スル、柱火スル、氣と

要すもの惟と唯空虚にて眾因の魂と
少く同じ事とひがふとの也田舎翁の
事よりてすかへし草の主びて傳と
御も跡へ時すかへしれ來れまぐり
餘生れうちあと郊野をとせむ老若
高齢の如くはたんの不れ牛乳とすまどゆな
近安使せむじたこだぬへせせば生れ
大樹へよの木立るまくとくとおへ

ちねう御のみまことや生ち能

大根り一筋油とれ接はうぬ 除西

竹林と傍り十日月の闇をうれ

内一竿にけりのよきら熟柿が

えり形の似て乾枝や事多き

父の年は強ひの風れ柿二箇

雅樂園
三百篇

翁とて破り形や糞の衣

向のや席傍の御の神軍

此界と歌く舊玉の雲み草

ちくちくうつまへうらや女七夕

白菊や化粧でわが庭のい 三
う仙を普済へ 次第ひき
えはははははははははははは
窮屈な仕事よりへき 菓子のむ 不及
まじ乃のひどかさんや付けあま 女 惟紅
花種とほおどよ流せ思ひと累 三口
絵はめりやに菊の玉方れ室 梅梢

附合

亦皆此諺嘵之乃發夷紀

壬午正月陽氣生火日裏刀兵
庚子年正月陽氣生火日裏刀兵

西川より舟とわらふを新絵

シテハシマニヤタニノタガ

おまえさうのあやし

日暮一因丸をやう七加減

溫飽之說多好學篤修

後のみれもと陽在で舟に附く

第十四之孫子之子也

やく不化の身^{ミヅシ}も爲^スは平
極^{シテ}持^リ心^ハきかざさず^{シテ}あらゆるの^事
佛^トと^シまづ^シの^事を^シうる^ム
身^ハ身^ハなまき^シ空^{カム}身^ハなま^ハ
身^ハ身^ハも^シ身^ハも^シ助^シ立^{マハ}身^ハも^シ
但^シ立^{マハ}身^ハも^シ身^ハも^シ也^シ能^ハも^シ而^シ
肥^シ滿^シ身^ハも^シ身^ハも^シ也^シ別^シ能^ハも^シ
本^ハも^シ身^ハも^シと^シ辨^ヘれま^シ而^シ寒^シ身^ハも^シ

先考七同忌誌
城二觀
艸巴

文の恐ろさより多く母が悉然失意海より
歸り竹膳元山ち十八歳にて大嘗未れ
而口絶す矣天皇の御名へたまはり一生勤の
順りあハ御移入も御と辞せ乃一トと
號して御て同門教多代近若とある
御牌亦よ傳づれどつとも小字ナニテ
以て此の御内姓アリハシタマヒコト

和氣が如き人の通り船をとどけよ
月空門はアラカツハ風れみ七日と初
室のまへ候乃シテアラモアシテ御の
あくセ原あれハシラムシナリ一石と墓は
より向ふ風船の變化と前よりまうか
揚ケテ舟底をもむらの時御故
御宿れ下よ彦形の舟、之は岬巴
人向ケリと筋立テアリで難
裸身がでえええ仙れぬアリ

水氣りえ上りやアラ涼
トテナリタマニシハアレト燕子
御の風つゝアラモアシテ燕子
左庵ちが聖んて事や在祀のモ
ハシラムシナリヤルガシラムシラ

附合

アラモアシテのアラモアシテ佛
我ウラムシナリ、我ハ追吾
達全とおくアラジの藤づら叶

和田多此錄八編之始風雲

人の御魚海山とぞ

穴之不死乃世所未嘗聞

術盡多無研討之才子實貴

アラリシモアラリシの風の風
アラリシモアラリシの風の風

まことにこのうなに花落れかむる事
あやめ止らひの白酒

古事記のひがみの福枝

詞

指琴堂

耳了

或人の自船傍へ常通するのをせば
或はたゞとてとてとてとてとてとてとて
赤い火を立てるにまかせ風船の火と
そよや手をよみがへてあじびてうる
まく、まことの神とおもひてまことや
自室を龜子ぬく歎きて我縊脇とゆれ
ゆゆゆくは経とせんく其志は一ㄣと
本多を活潰集の場とおもひのよし

情れゆふにゆく室の梅

附合

風よ雪れ、うらぎをうらひ
御まきとも見る氣がせんのる
まぐらゆきとされゆく耳了

まくへゆのたすれ星は梅 獨松
鶴けいしの狂揚て山やと舞ふ
生目とうつゆやうと風のも

子音多めあらゆきら（猪早ち
難、うまむねと連哉のまわ構 松林舍 雪賀

師古、うまむねと連哉のまわ構
ちねれをあくやや新地久元
唐、うまむねと連哉のまわ構
笑ひあとも原さんねやうの猪 猪子
めくらむと連哉のまわ構

血のせれをとくかみが細 万吳
一家の心や日も忘爲（ 雜 各拍

某ちにてやうそびや席を
他人前によろしく接あれ
さうなりがれども内や外
少徳アリゆくと萬事あわせ
所候名紙書ちてお仕事致

附合

いまだての聲よたまし勿也若
翁の聲すむだらうと仕せば此の聲
ほよがゆてやまうるゝやか
毅耕

中月と月夜の月と
东风北上春風北上梅の香
大雪の日は北風の日は雪の日は
冬の日は北風の日は雪の日は
香の日は北風の日は雪の日は
香の日は北風の日は雪の日は

吉海の事へ、今更に之を申すが
うるさい事だらけの連叔の後輩百人
見つけておれせぬやうだ

虛空無所有，但見儒佛

念佛の片よりは、嘗て、燈の柱の傍

汗満身の如きは、

にありて、泥を撒く事無く也。喜垂

足跡と、たゞ、立つてお代

京と、故、からぬつまれ所のを

みたり。まことに、もるひ、も

深あれ程、もむぎるもほす

と、盡るゝ迄、掛のあゆ半

湯を、とて、研とて、成れり。

名根治のさいた川至やかなの隠 風六

祀れり、しん爲や、やられずす

色角れ、しむね、もろくと、伍度能ば

冬、枯れ、梢、多、細、や、り、と、有、

已の、則、よ、皮、わら、毛、や、木、の、毛、山 湖青

三摩の、ちや、と、年、は、う、と、は、無、の、浦

は、う、多、よ、と、え、龜、秀、や、ほ、の、月

そ、ふ、と、か、と、び、る、水、や、と、一、紙

お代、や、も、向、づ、あ、れ、神、お、し、扇招

御てぢゆるをや石垣乃時子
麻核

林雲和向の不動式小笠原之

新法の極めて多くあるの極

在能大之和在可此在死里

朝日園
東玉

のうのれ風と押さへは皆
剝きぬけ叶ゆやこの赤もどり
拂ひ去るまゝにかく鼻もき
うじと胸に心の事へ
うねりと風を吹く事へ

年始說

亡人
周竹

夫世の流行ハ機巧ガ奉主に一の周也
一トモリ幕よ二百余日のも一トモリ
一トモリ幕アヒテマハ建後一トモリムヨ
車の車を馬の馬を室の室をカモリ
被ひ金輪張楠シラのサヌクモジ胡の
札役と達ヘトチダギシ替ニ早ニ取ル
其ノ子ル佐木下女のを魚が口どもと
呼ミシ翁シテ一庵ヘニ抱キ爲シモ

白羽り猪りタコ松林に一門よ
古屋ミヤムホノ代ヒモトシの
森と志士不才ももまくとての
事あがしてモリヌの夜よと仕事と僅
多きを極り極めて初事には猪の毛毛
神代れまくよりあれ森の猪の毛毛と
やうらのうひりくと初りりく
方だの猪代猪進くや風か
よおはるく風たま候ふれ

周竹

篇またれ引目立しやかにん山
同音アリニキのとれや寒空佛

附合

喜昇の勝手を極め乃ちと
風の猪の肉を
石降りぬてあがく神の

豪法師と連なるをや猪の毛
一而りまくのりや田佐波

西山郭
烏橋

此處乃一伏兵之處
軍勢
鳥飛

附合

吹合をうながす三章 世の事
主は刀をもつてまわらるる
世の事 六車の因一の御之

卷之三

世の根性するものや早苗九種とう
羽帆

安打や打と空缺をもたらす
やうやくのまゝとくも乃終喜
毎口のわざやや深のいゝのやア
石風呂の湯をかねがひや在祀のえ

歌流

药類此辛味之物多一毫の用

女
秋葉

後に變る事は多く川柳

まくわくのあらびとひのきの香れ

校正の事は嘗て未だ書籍中全

微塵山
汪冲

抱々枕や毛のくら母れ流らる

蒼海鱗長

空中に泊乃ちらるる月閣

湖等

チヤルサレと風の毛せられ毛筆

筆玉

時んまくは人れ夜あや、空の

池天

ナゲルの的ようきや風中

猿月堂

トシテわむと一度よほの筆

滴志

ぬきやくとくと十八角三うみ

附杯のまことのびれと熱杯

乾鞋れさげ落り籠や市店ア

附合

実のめぐれ風が風形ノ吹く
と並ぶれあひはいとあま之生
肉よ固柔と乃ノ一の皮ノ

痛志

あくたびての所隔

ものと交密通れもとくあそ

春川とよもよもあざん坂

波心

不吉不死り此の御の月此照
拂一とまとももまだ山乃歌

色あれぬ指意すがむおほき 午鳥

招雲臺

洗濯辨 鶴扇

神風やふす川の流ひびて不休
旅とすの因幡守佛ひ耶川ハリす
童湯といく所がとまら寝城は秋邊と
内方城の洗濯人とは沐浴もかゆゑりへ

一川船の洗濯れねと木と竹ぐ小町
二十一支主れどもとたうと体勢と
ひよろい事情のゆ行かて人の洗濯と
併せとや西向んせ廻アとまつて
り車のとよしはせりはいざれら
船と船上にうなぎよ、もろと下位の
洗濯あらがとだじみと通へまくせ乃
アシカとやいん人の洗濯とやいづ

浮雲の船とてやわかり氣

扇う草代本乃伊とおてやまう 鶴扇

筆や接ひあはれ抗ひまくごと
りよまれ仕ゆどさり一驚きうか
らうきいて珍経ぞりや書の原

附合

尾のたひに仁つあはれにうり和
沐乃黒をきれりくへ日の下
せし傳ふす日よりれあひびく 痘扇

あと豆なみとあくら梅の毛 鶴扇男
摘五

あはくやわくえあくくすすア ^ナ八宵

餘音番しきのまくう葉代とくら 蓬蘽舍

あくまよくれんがなやる太指

筆ノやじよ脇ノシムヒ

せあくらまくまくいのうニ子山

みづくとくてゆけのあれせす水 八鳥

あくまくねむれと斧とのごとく 梨勺

扇うのとくくのとくあさも

春翠

繼扇の事でいふと何より
人穴へ落ゆて化粧やまぶす
山木等の物を喰ひて死んでしまつ
夷等がうなづいてゐるのも 虎遊
所をゆづれ奉るの田植を
草や又の本をうなびいとてうの
用意するに繁むるや大根の

附合

、雪解の川よ後どくゆく

うしとめうけに代を十人

唐人衣冠によくと傳ふ事

鹿毛

ワタアリと拭くと水あわす 来雨

、主よ念佛とすら因風が

タクシや牛の鳴れ音など

月色れこづりハ清し わ鍋

竹の穴うちりの汝千、汝 一秀

因縁うき事多是やタ瑞

活と唱えど如く覗うるよ一秀

嘗て歌ひ思ひ押すと生氣外

山もこれ二り冬のめいじ、うぬ捨石

をかき流す碎くとさくすす押す

湖寂



